

文明一八年（一四八六）七月二六日、扇谷上杉家幸・太田道灌が暗殺された。優れた家臣に対する猜疑心に、その主君・上杉修理大夫定正が凶行を思い立ったのである。

「当方滅亡！」

これは、今際の際に道灌が叫んだと云われる言葉だが、その言葉のとおり、扇谷上杉氏の衰退の兆しは間もなく表れるのである。

道灌暗殺の入れ知恵は、山内上杉四郎顕定による。

道灌を生かしては、上杉宗家である山内家が衰退すると危惧したためだ。

扇谷家ではこの奸計に乗じたものの、やがては道灌ほどの者を失った失敗を嘆くこととなる。さりとして、己の失態は認めたくない。扇谷上杉氏としては、山内上杉氏を糾弾するしかない。

結果、両家は必然の如く、決裂していった。

享徳の乱に引き続き上杉一族の内乱が、道灌暗殺を機に、関東全域に広がっていく。関東はこのときから、戦国時代の臭いを漂わせ始めるのだ。

およそ二〇年後の永正二年（一五〇五）。ようやく上杉一族は、遺恨を抱きながらも、和解をした。

理由は、単純だった。

西から、高潮の如く押し寄せる脅威に、ただ狼狽えるまま、遅まきの対応に迫られたからに他ならない。

伊勢入道宗瑞。

太田道灌が存命のうちには、彼は機を待ちじつと息を潜めていた。故にその死後は、野心のままに、怒濤の勢いで行動を開始した。

関東の国盗りに挙げた宗瑞は、繊細にして大胆に、まずは相模の土地ではなく人心を侵略していったのである。

太田道灌に匹敵する才の持ち主と囁かれた上杉家重臣・大森氏頼は、早くから宗瑞の存在を危険視していた。その野心をじつと看破し、決

して心を許そうとはしなかった。主君・扇谷上杉定正に対し、このことを強く進言した。（大森教訓状）なる諫言を言葉にしたのも、道灌に成り代わり主家を守りたい一心である。

その必死の想いに、扇谷上杉定正も頷かざるを得なかった。

伊勢宗瑞は、気長に機が熟すのを待った。

やがて氏頼が病死すると、宗瑞はその子・藤頼に接近した。凡庸な藤頼は、宗瑞の魂胆も見抜くことも出来ず、一切の警戒を怠った。その油断を確信してから、とうとう、宗瑞は大森氏の居城である小田原を、鮮やかに奪い取ったのである。

新興勢力である伊勢宗瑞の目的が、上杉家へ直接結びつくものである以上、一族内紛をしているところではない。

山内・扇谷の両家が一致団結した背景には、そのような事情があったのである。山内・扇谷の両上杉家が一致団結することは、遅きに過ぎた秩序回復への道となった。そして代替わりも手伝い、古河公方・関東管領という、足利・上杉の両輪体制も、徐々に回復されようとしていた。

この時代の古河公方は、成氏の子・左馬頭政氏という。

政氏は、古河へと追われた父の悲願である

「鎌倉公方への回復」を望んだ。

そのために、多くの関東豪族へ官途・受領・諱などといった、権威づけを与えた。武力の心許ない政氏にとって、その手段はまさに外交である。そうすることで与力を集い、同時に、その体面を保ちつづけたのであった。

それでも大義名分というものは、やはり有難いものである。

関東の豪族たちは、足利と上杉両家の間を巧みに渡り歩いて、家を保ちその格式を高める努力をしていた。

この永正二年という年は、上杉家にとっては内紛終息のめでたい年であった。

が。
足利家にとつては、実は分裂の危機に瀕する重大事のときを迎えていたと云つてよい。事のはじまりは、政氏の嫡男・高基の一言から始まった。

「関東管領家（上杉氏）には、公方家を支える力もない。これに代わり得る実力を持つ補佐があつて、はじめて足利家も鎌倉への帰参が適うというもの。いまの世は、関東広しといえど、寄るべき力のある者は、小田原の伊勢入道をおいて他になし」

この言葉に、政氏は激しく反発した。上杉の領土を奪いながら、その基盤を広げつつある下剋上の輩。それと与することは

「公方家として、恥じるべき所業なり」

実より名を重んじるべしと、政氏は強く主張した。片や目的のためなら、手段を問わぬと、高基は主張した。

この父子の考え違いが、やがては足利公方家の内紛へと発展していく。

安房国安房郡北条郷八幡

ここにひとつの社が鎮座する。鶴谷八幡宮という。かつて、安房国府の置かれていた三芳から遷座されたのが鎌倉時代初期のこと。以来、武士の八幡信仰に支えられてきた。

この鶴谷八幡宮の造りは、鎌倉鶴岡八幡宮を模したもので、すなわち海に向けて直線の参道が開かれている。参道規模は鎌倉に勝るとも劣らず、その形を酷似させる八幡宮を称する社は、全国でも希有な存在だ。

この当時、里見氏は鶴谷八幡宮大檀那という地位を確立していた。

それは、安房国主もしくはそれに相当する、という意味を持つ。つまり里見氏は、安房国において、誰も無視することのできない存在へと成長していたのである。

その大檀那として、時の当主・里見上総介義

通は、長年の戦乱で荒れ果てた鶴谷八幡宮の修復に乗り出そうとしていた。

「これは殊勝なる仕儀にて、八幡大菩薩の御加護が大殿を御守り致しましょうぞ」

那古寺住職・義秀は、稲村城の義通を訪れて、鶴谷八幡宮の修復の謝辞を述べながら

「足利家のこと」

を語り合つた。

そもそもこの那古寺は、鶴谷八幡宮の別当寺にあたり、更には鶴岡八幡宮別当雪下殿にも属している。雪下殿は足利家縁故の者が住持として入ることが古来よりの慣習だ。そして、そのことは、宗門という鎖により、那古寺が鎌倉と密接であることを暗に意味していた。

この那古寺二世別当・義秀は里見義通の兄弟である。
十十十

鶴谷八幡宮（1）

夢酔 藤山